

令和3年10月15日

南の風 419

南部地区ミニバスケットボール連盟

会長 藤原 敬一

418号の引用の続きです。

これら「教えないスキル」の核となるものを獲得するプロセスで、私は気づきました。「伸ばしたい相手を主語にすれば、誰もその相手のために心地よい学びをつくらうとする。誰も工夫し始めるのだ」と。

注目すべきことが明確になっていくにつれ、指導者の間で「合言葉」が生まれました。

そのひとつ「インテンシオナリダッド (Intencionalidad)」は、英語でいうインテンシオナリティ、「志向性」と訳されます。要は、指導者は言動に「意図」を持ちましょう、ということです。

例えば、2章でお伝えした「3歳児の練習メニューづくり」を思い出してください。そこでは考えさせる要素の有無が問われます。意図が明確でないものはNGなのです。

もうひとつが「自覚している状態を表す「コンシエンテ (Consciente)」、英語でいうコンシャス (意識的・自覚的)」という言葉も大事にしています。指導者が、そのことがどういうことかわかっている口にして、行うことの大切さを指します。

3章で、いつも何気なく使っていた「ビエン (いいね!)」が空っぽだったと気づいた話をしました。そうやって気にせずに使っていたたくさんの「無自覚」を掘り起こす作業を丁寧に行ってきました。まさに大人の気づきを問う部分です。

また、すでに述べましたが、10人のメンタルコーチが私たちの指導改革をサポートしてくれました。ここまでの規模でスポーツ心理学の専門家をフルタイムで雇用しているクラブは、欧州でもなかなかありません。

～ 中略 ～

彼らは、他のコーチと同じように練習や試合の現場に立ちます。心理学の視点で外からチームを見守りながら、ミーティングなどでサポートしてくれます。

フットボールクラブでメンタルコーチの重用は珍しく、心理学を信用していない人はいまだに少なくありません。

今でこそメンタルコーチの重要性を痛感した私ですが、当初は懐疑的でした。なぜなら心理学とは何なのかよく理解していなかったからです。

例えば、各チームには必ずボディケアをするメディカルトレーナーがいます。体のケアは必要だという認識がすでに浸透しています。痛みや腫れなど、炎症を起こしている事実はわかりやすいので、選手もコーチもケアを求めます。

続きは次号にします。